



申11号「電気部門の変革2022」に関する説明申し入れ（第1回交渉）その1

第1項 設備21で目指した、電気部門における管理のフコの育成状況を明確にすること。

Q(組合)・平成への世代交代は最終段階。「安全・健康・働きがい」を確保して納得して施策を担えるよう、設備21の到達点、課題を明確にすること。

A(会社)・働きがいある施策を目指すのは一緒。設備21の振り返りは各支社と概ね議論は出来ている。

Q・設備21で会社が目指した管理のフコの育成状況はどうか。

A・JRは設備管理のフコ、通常のフィールド検査はTEMS。JRはデータを見て適切に判断し順位を付けて対処する。判断には技術力を付けるのが大事。直轄検査訓練や基礎技術習得訓練などで安全・安定輸送に向けて一定の成果があった。

Q・判断の場面に直面すると現場だけで判断できないこともある。成果の根拠は。

A・以前よりトラブルが減った。joi+tabで指令からのバックアップなどツールを使い異常時対応のサポート体制を取っている。障害復旧訓練もおこなっている。

Q・出向等を通じて人材育成をおこなってきたとあるが出向が果たしてきた役割とは。

A・大きく分けて2つ。ベテランはエルダーとして、若手・中堅は技術力の向上。JRに戻り実務に活かして欲しい。相互出向も進めてきた。

Q・若手の育成7ラン7年という位置付けは変わらないのか。

A・今後も変わらない。仕事の中身が変わっていく。マイナーチェンジは必要。

出向はシニア雇用・一定程度の人事交流の位置付けであることで一致

第2項 JR東日本の電気技術者を今後どのように育成していくのか明確にすること。

Q・「技術的な判断業務に注力」とあるが電力・信通それぞれ具体的に明確にすること。

A・従来電気設備は法令に基づき検査をしてきた。モニタリングでデータを把握し悪くなってきたら、現場にピンポイントで行く。JRの判断能力を高めるために行う。

Q・数値を判断するのか物事を判断するのか。

A・モニタリングでは画像やデータを連続して取っているので悪くなってきたら分かる。数値ということもあるが、故障前のグレーゾーンで現場に行くことが出来る。

Q・予兆を判断できる力はどのように付けていくのか。

A・通常が分からないと異常も分からない。訓練をおこなっていく。

Q・正常な設備を知って、変化を見なければ異常時が分からない。これまでも現場に行く体制を求めてきたがどうか。

A・現場に行って技術力を維持していくことは否定しない。

Q・JRの技術者は技術的な判断が出来る人を育てるということだが、出てきた予兆を読み解いて修繕できる人を育てるべきだ！

A・正常な状態を見て故障の判断をするのは一致している。100ある設備を全て見るよりも、予兆のある5つの設備により注力していける体制にしたい。

Q・頻度が減る中で判断力を養えるのか不安だ。引き続き議論が必要だ。

～その2に続く～